2024年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

専門科目 日本文学 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号	
--------	--

成	
績	

2024年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

専門科目 (日本文学 専攻分野)

(注意事項) ① 第一問の解答は、答案紙二十行程度を標準とする。

② 第二問 1 から 5 までの解答は、それぞれ答案紙八行程度を標準とする。

③ 第五問の解答は、答案紙十七行程度を標準とする。

④ 第一問から第五問まで、すべて縦書まで解答すること。

1. 「文学」とはいかなるものが、自身の見解を述べなさい。また、その見解が、大学院で行う予定の自身の研究の目的、方法とどのようにかかわるのかを説明しなさい。

5 関東大震災と文学

三 次の和歌を翻字し、口語訳しなさい。

あはれを思ふ心は 秋の空

秋の空は 思ふ心

五、 次の文章は、野間宏「顔の中の赤い月」(『総合文化』第二巻第二号、昭和二年八月)の冒頭部である。この小説を読み解く上で重要なポイントとなり得ると考えられる事項(モチーフ)と表現・語りの特性について、本文の記述を抜き出しながら説明しなさい。なお、複数の事項(モチーフ)や表現等を取り上げてもよい。

未亡人堀川倉子の顔のなかには、一種苦しげな表情があった。もちろん彼女の顔は、日本の女がときに持っている、あの幾らか冷やかな輪郭の線の中に柔らかい肉感をどしこめているというようないわゆる近づき難い高雅な美を形づくっている種類のものではなかったが、それは、また、その眼や鼻や口のどれか一つが全体の諧調を破ることによって魅惑をつくり出しているというような種類のものでもなかった。その顔は顔そのものとしてはどちらかと言えば普通にととのった、流通性のある美しさに属するものにすぎなかったが、確かにその顔の中には生命の伸長を途中で何ものかのために無理強いに奪い取られて、そのために、どこか歪んでいるといったようなものがあって、それが、その顔に、異常と言えるほどのエネルギーにみちた美を与えているのであった。そして彼女の顔の中のその苦しげなものは彼女の白く広い額と、よく外界の変動に変化するいくらか肉の厚みの足りない口辺とににじみ出るように現われているのだった。

北山年夫は、彼女の顔を見る回数が次第に多くなるにつれて、その顔の表情がだんだん自分の心の深みに、はいり込んで来るのを認めた。彼は一年ばかり前、南方から帰って、東京駅の近くのビルディングの五階にある、知人の会社に席を置いていたが、彼はよく廊下やエレベーターの内や便所の入口などで彼女に出会った。そしてその度に、彼は彼女の顔の中に、その一種不可思議な苦しみの表情を見出した。彼は彼女の顔が、彼の心の内にある苦しみに、或る精神的な甘味と同時に痛みに伴う作用をするのを認めた。